

■ OnAir 3000 ユーザーレポート

株式会社エフエム愛知 様

OnAir 3000

3つのスタジオを OnAir 3000 で統一



■ 生放送スタジオ (S1)

株式会社 エフエム愛知
技術局 技術部
櫻井 修・日榮 雄二

生放送スタジオ及び収録用スタジオを更新
(株)エフエム愛知では、前号(スイス・サウンド・ジャパン Vol.20参照)で紹介された、生放送スタジオ(SA)の更新後、残りの生放送スタジオ(S1)と収録スタジオ(S2)の更新を行いました。

社員や制作会社のディレクターが、どこのスタジオに行っても共通のオペレートができるように、音声卓は前回の更新工事からSTUDER製品のOnAir 3000で統一すると決定していましたが、各スタジオの大きさや使い方が若干異なるため、音声卓や周辺機器を収納する机や家具、そして周

辺機器のレイアウトや配線に関しては将来的な拡張性を含めて考慮しました。

また前回SAスタジオ同様に、内装の老朽化が激しいため、スタジオのアナウンブースとサブの内装改修を行っています。特に生放送用のスタジオ(S1)では、天気や高速道路の渋滞状態が見たい!という現場の意見を反映し、いままで壁だった場所に穴を開け、窓を作りました。

収録用スタジオ (S2)

S2スタジオは生放送が無く、収録と編集に特化しているため、他の2つのスタジオと比べ部屋は狭く、機材も若干少なくなっています。そこでレイアウトフリーなOnAir 3000の特徴を活かし、他のスタジオと同じ音声卓を使用して、生放送と同

様なオペレーションで、1人でも効率良く編集や収録作業ができるように、フェーダー数を生放送のスタジオよりも減らして18フェーダーにし、音声卓を中心にCDやDAWなどの周辺機器を手元近くに配置したレイアウトになっています。

内装に関しては、この収録スタジオには窓が無いこと、西側の壁がすぐ外であることを考慮し、防音や防湿の対策を以前のスタジオより改善していただきました。もちろん前回同様にスタジオよりも明るく・広く魅せるコンセプトはかわっていませんが、生放送のスタジオと違い、オペレーターにもゲストにも落ち着いた雰囲気での収録や編集作業に臨んでもらうため、森をイメージした、緑色がベースの配色にしてみました。



■機能とデザインを融合したコンソールデスク (S1)



■収録スタジオ (S2)



■3部屋共通デザインのアナテーブル (写真はS1)



■2008年2月から稼動している生放送スタジオ (SA)

生放送スタジオ (S1)

S1スタジオは、月曜日～金曜日の毎日2番組と、日曜日の朝に1番組を生放送しています。そのため、音声卓の仕様やフェーダーのチャンネル数(24チャンネル)、アナブース内のマイクの本数(増設分を含む)が8本と、基本的にはSAスタジオとまったく同じ内容ですが、SAスタジオにあったマスター緊急時の非常放送等のEMG機能はないため、多少シンプルな設計になっています。また工事終了後に、急遽ワンマンDJでの生放送運用が週1回ですが始まりました。それまで弊社ではDJがワンマンで生放送をする経験がレギュラー番組ではありませんでしたが、OnAir 3000の柔軟な機能と拡張性により、すぐに対応することが出来、問題なくワンマン放送を開始す

ることができました。

S1スタジオは前述のように、ブースの奥の壁に穴を開けて窓を新設しました。日東紡音響エンジニアリングの音の反射や吸音に大変配慮いただいた設計のおかげで、今までのスタジオには無かった明るさと開放感を演出でき、DJや制作の方にも大変高評価いただいております。

導入後の感想

OnAir 3000はタッチパネルなどの機能やEQ・COMPなどの操作がし易く、シンプルなデザインであるため、番組ミキサーや制作ディレクターに「新しい機材を覚えなくてはいけない」という不安や戸惑いが少なく、音声卓の設定がスナッフショットにより他の番組に左右されず保存できるな

ど、機能面においても受け入れられることが早かったように思います。前回のSAスタジオに引き続き、今回の2つのスタジオも同じOnAir 3000を導入したことで、現場スタッフがどこのスタジオに入っても、生放送や編集作業が同じ状況で行えるという点で、大変高評価をいただいております。初めのスタジオ更新工事を終えてから1年以上が経ちましたが、全てスタジオにおいてトラブルもなく、メンテナンス作業もスムーズに行えるため大変満足しております。

最後にスタジオ改修工事にご尽力いただきましたスチューダー担当者様をはじめ、日東紡音響エンジニアリング(株)様・(株)テクト様には、短いスケジュールの中でお気遣いと多くの要望に応えていただき、厚い感謝と御礼を申し上げます。